

心理コーディネーターになるために Vol.8

山下桂永子

☆月末統計

数ヶ月に一度、事務の A さんがいつもどおりのエレガントな笑顔で言う。「山下先生、今忙しい？来月議会があるので、統計をそろそろ。。。」

「あー！そうだすみませんすみません！やりますやります。ちなみにいつまでとがありますかねえ。。。？」と笑顔でごまかしながら何うように聞く私。A さんは「そうですねえ。指導主事の B 先生から



からは来月議会があるから○日までに欲しいと言われていて、私としては△日までに打ち込み終えたいので、山下先生は数が多いから、できれば◇日には欲しいですね」と笑顔を崩さず、大変優しく具体的に指示をくださる。そして締め切りが近づいてくると、A さんは私以外の相談員に、そっと「山下先生、やっぱりお忙しいかしら？」と伝える。私以外の相談員は、「ほら、山下先生、統計そろそろやらないと。A さんが困るでしょ。ここ私も面接空いてるからやりましょ！」と手取り足取り宿題を見るお母さんのように私の統計を手伝ってくださるのである。A さんと働くようになって 7 年目ぐらいだと思うが、A さんはすっかり私の動かし方を心得ておられる。

☆教育相談の数値化

ここで言う「統計」というのは、「教育相談月末統計」の略である。教育センターに相談に来られる保護者や児童生徒ごとに相談回数をカウントして、相談員が月末ごとに提出することになっている。

「月末ごとに提出することになっている」のだが、私は未提出常習犯である。夏休みの宿題は始業式前日にするタイプである。対人援助マガジンは締切日に提出するタイプである。さっさとすればいいものを、数字を扱う作業は苦手なこともあり、手をつけるのが遅いのは私が悪い。しかしなかなか出さないからと言って、ぎりぎりでもいいと思っているわけではないし、統計も宿題も軽んじているわけではない。

正直言えば、心理指導員になるまでは、予算を取るのに大事なんだろうなというぐらいは思っていたのだが、正直そこまで大事なものとは思っていなかった。一人ひとりの相談内容を「不登校」「発達」などグループ分けすることに不全感を感じたり、数値化することに

味気なさを感じていたりもした。「これ、状態としては不登校だけど、あれも、これも関係あるし、分類できないなあ」「面接回数が多けりゃいいってもんじゃないでしょ」などと思っていた。

しかし、心理指導員になって 1 年経ったところに、相談員の予算大幅削減という事態になり、「教育相談統計」は、大事なんでもんじゃない、教育相談について理解をしてもらうためにはなくてはならないツールの一つなのだと気づいた。

もちろん教育相談の予算を確保するために議会に提出する、ということはあるが、数を多く出せばいいというものではなく、それ以上に、教育センターでの教育相談の業務内容を説明するときに、数字があるとイメージしてもらいやすいのだなと少しずつわかってきたからである。



☆数値化がイメージにつながる

不登校の子どもと話をしている、「朝起きられへんからずっと学校行ってないねん」と言われたりする。<毎日何時に起きてんの？><ずっといつから学校行けてないの？最後に行ったんいつ？>などももう少し詳しく聞くと、午後まで寝ていることは少なかったり、週 2 は放課後に学校に行っていたりする。詳しく数字として聞くと、実際はどんな生活をしているのかのイメージがわきやすい。

抽象的な指示では、不安になりやすい子に「～時～分までは、学校のことについてお話をして、～時～分まではトランプをして遊ぼう」「コップに高さ 5センチまで水をいれて」など伝えるとスムーズに動けたりすることもある。

教育相談が、誰が何をどのようにしているのかという部分はどうしても可視化できないし、説明もあいまいで抽象的になりやすい。しかし具体的に数字で聞いたり伝えたりするとイメージを共有しやすい。それは、中で何をどのようにしているのか、目には見えにくい教育相談を説明するにも有効なのではないかと思う。

☆A さんからの気づき

それに気づかせて下さったのが事務の A さんだった。A さんと一緒に働くようになって今で 7 年目ぐらいだが、A さんはよく私に質問や提案をしてくださる。「山下先生、先日買ってほしいと言っていたあのおもちゃ、どんなふうにするの？予備もいるんじゃない？いくつかカタログを見ていたら、こっちが色も豊富にそろっているの、どうかしら？」「検査用紙って高いのねえ！いつぐらいの時期にどれぐらいいるの？消耗品より先にこっちを買っておいたほうがいい？検査は面談より時間がかかって、そのあと親御さんに結果を返したり、学校とお話をするとかあるんだから、ちゃんと面談とは別に回数をカウントすべきだと思う。統計のここに欄を作ってみただけど、どうかしら？」など今や、私が思い至らない予算や統計の部分に気づいてくださったり、相談員が快適に活動できるように日々

気を配ってくださっている。

A さんもきっと最初は上から数字を出せと言われて、相談員から集めた数字を打ち込んで表にしていただけだったり、教育相談の予算で買ってほしいという物をそのまま買っていただけだったと思う。

しかし、統計やお金など数字を扱う一方で、プレイルームからもれ聞こえる子どもの声、通ってくる親子の様子、相談員たちの動きなど見ながら、教育相談に興味を持って下さるようになったのだと思う。

そして改めて教育相談に関する数字を見たとき、明らかに A さんの中で教育相談に対する評価は変化した。それもとても好意的に。これは A さんに限らず、同じ教育センターで働く指導主事にも言えることで、教育相談を見ながら教育相談に関する数字に触れることで、教育相談やその予算に興味を持って、疑問があれば私に聞くことで、数字とそれが表す意味をつなぎ合わせていき、イメージが深まっていく。



相談に来られる一人あたりは1ヶ月に数回程度であっても、教育相談全体の数字にすれば、ここ数年、年間ののべ相談件数は3000を超える。少なくとも3000回以上、誰かが学校生活や家庭生活の中で、困ることがあり、学校では相談、あるいは対応できない事象があって、教育センターで相談されているのである。その数字と実際を見て理解はより深まっていく。

そんな A さんの教育相談への理解と愛は時に心理士よりも鋭くて深い。「この関わり方は、心理的にちゃんと援助になっているのだろうか」と日々迷いながら、他の相談員たちと協力してなんとかかんとか教育相談を行う私のバックには、そんな教育相談への理解が深い A さんや指導主事、その他心理士ではない多くの方々がついていて、日々温かく見守り、支えて下さっている。

